
とある野球少年の異世界目録

澄風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある野球少年の異世界目録

【Nコード】

N0565BA

【作者名】

澄風

【あらすじ】

エクスリーグの世界大会決勝戦後に起きた真の最終決戦から数年元ビクトリーフィンチーズのエース・小波栄一は年下の恋人・天月紗矢香と共に学校へ登校していると、路地でガンダーロボとその持ち主であるカメラと出くわす。運が悪く時空転移に巻き込まれた二人が辿り着いた次の世界、そこは学園都市と呼ばれる超能力者を育成する場所だった。

プロローグ（前書き）

作者はド素人です。独自解釈やキャラの性格が違ったりするかもしれませんが、この世界は無限にある平行世界の一つ何だと思ってください。

プロローグ

エクスリーグ世界大会決勝戦後にあつた真の最終決戦から数年。

俺こと小波栄一は高校生になり、今も大好きな野球を続けていた。

世界一の野球選手になるという夢を叶えるべく現在はフィンチーズで一緒だった幾人かの仲間たちと共に、高校球児全員の夢の舞台である甲子園を目指して猛練習に励んでいる。

そして今日も俺は朝早くから目を覚まして野球の朝練へと向かおうとしていた。

「それじゃあ、行つて来るよ！ 湯田父さん！ 山田父さん！ 落田父さん！」

玄関で運動靴を履きながらリビングの方へ挨拶をすると、俺が父さんと呼ぶ眼鏡を掛けた三人の中年男が姿を現す。

エプロンを掛けた母親代わりの湯田が、

「行つてらっしゃいでやんす！」

ワギリ製作所の黄色いヘルメットに水色の作業着姿の山田が、

「車に気を付けるでやんす！」

兄貴分とも言える迷彩柄の軍服姿の落田が、

まだ中学生位で、背に流れる紫がかかった長い黒髪に大きく澄んだ涼しげな瞳。

可愛いというよりも美人という言葉が相応しい秀麗な顔立ちで、清楚な神桜女学院中等部の白と青のセーラー服姿は、今では絶滅寸前と言われている大和撫子を思わせる。

「紗矢香！」

小波に名前を呼ばれた少女・天月紗矢香はこちらに気付くと物静かそうな雰囲気とは打って変わって、可愛い笑顔浮かべてこちらに走って来る。

長年の付き合いで次にどうなるのか知っている小波は苦笑しつつ両手を広げ、

「栄一さん！」

抱き付いて来た紗矢香を抱きとめた。

「おはよう、紗矢香」

「おはようございます。栄一さん！」

笑顔で挨拶をし合う二人。

その姿はどう見ても恋人同士にしか見えない。

実際に二人は両親公認の三歳離れた恋人同士である。

つい最近までは「お兄ちゃん」と小波を呼んでいたが、今では「お兄ちゃん」では恋人らしくないという理由で「栄一さん」と呼んでいる。

「こんな早朝に会うなんて珍しいね」

「はい！栄一さんと会えるなんて早起きして良かった〜」

体を離して向かい合い、両手を頬に当てて赤らめながら嬉しさを表す紗矢香。

その仕種は山田父さんが働いているワギリ工場の浅井漣を思わせる。

「今日も野球の練習なの？」

「うん、まあね。夏の大会も近いし」

「野球部のエースだもんね。甲子園・・・必ず応援に行くから！」

「気が早いよ、まずは地区大会の強豪に勝たないといけないからな」

同じ地区にいる暁大付属の井石遼の事を思い浮かべる。

嘗て世界で一番最初に魔球を投げた小波に対して、世界で三番目に魔球を投げた井石は当初、小波にライバル宣言してきた自称ライバルであったのだが、とある事情で小波が所属していたフィンチーズに加入して共にチームの主力としてフィンチーズを世界一へと導いた男である。

小中で果たせなかった雪辱を果たすべく彼は小波とは別の高校へと

入学している。

間違いないく地区大会で立ちはだかる壁となるであろう事を彼の實力をよく知る小波は予感していた。

そんな小波を見て紗矢香は笑顔で、

「絶対大丈夫だよ！だって栄一さんは世界一の投手なんだから！」

「ありがとうな、紗矢香。それじゃあ学校の近くまで一緒に行こうか」

「うん！」

小波は時間を確認すると歩き始め、その後を紗矢香は並んで歩く。

「それにしても今の世界は平和だよな、三年前にあんな事が遭ったのじ」

三年前に起きた謎の現象を思い返して咳くと、紗矢香も頷く。

「あんな事は二度と起きない方が良いに決まってるよ。でも何事も突然始まるものだからね・・・」

「それもそうだな」

二人並んで他愛の無い会話をしながら歩き、別れ道まで来た所で二人は立ち止まる。

「それじゃあ私はこっちだから・・・」

「うん、気を付けてね」

「はい。栄一さんも頑張ってください!」

紗矢香と別れ、彼女が道角を曲って見えなくなると小波も時間を確認して遅れを取り戻すべく走り出そうとした瞬間

「きゃあああああつ!!」

「紗矢香!?!」

彼女の叫び声が聞こえて小波は彼女が向かった方へと急いで走る。

「紗矢香!?!どうした」

思わず小波は言葉を失った。

尻餅を付いている紗矢香も同様である。

二人が道角を曲がって目撃した物、それは つ!?

「が、ガンダーロボだとく!?!」

そこには小波の父親達が大好きな夢の巨大ロボが倒れて道を塞いでいた。

「え、栄一さん!?!」

尻餅を付いていた紗矢香が立ち上がって不安そうな顔で小波に駆け

寄り、彼は彼女をいざとなったら守るべく前に立つ。

「何でこんな所にガンダーロボがあるんだ？」

「もしかしたら私の能力が関係してるのかも………？」

「それは分からないよ。……とりあえず調べてみるか………」

巨大ロボットを警戒しながら二人はジリジリと近寄る。

すると頭部のコックピットらしき場所のハッチが開いてダースベイダーみたいなコスプレをした一人の中年眼鏡男が現われた。

その男の姿を見た瞬間、二人は思わず言葉を失った。

出て来た人物が小波の父親達にそっくりだったからだ。

「イタタタタ……酷い目に遭ったでやんす」

「やんすって……やっぱり父さん達の親戚か？」

「そうじゃないのかな？口調も姿もそっくりだし………」

頭を押さえてフラフラとしている男は何か酷い目にでも遭ったのかげっそりとしており、周りを見渡すと二人にようやく気付いた。

「ちょっと聞きたい事があるんでやんす。ここは何処でやんすか？」

「ここは神桜女学院の近くですけど……それが何か？」

男の質問に紗矢香が答えると、男はうんざりした様に大きな溜息を付いた。

「今度の世界は地球の日本でやんすか・・・」

「今度の世界って事は・・・おじさんはもしかして異世界の人なのか？」

「むっ！？オイラはおじさんではないでやんす！時空の覇者カメダでやんす！」

「その時空の覇者がガンダーロボに乗って何しに来たんだよ？」

「クククク、勿論世界征 じゃなくて新型のダブルオーガンダーのテストでやんす」

「今明らかに世界征服って言おうとしたよな、紗矢香？」

「確かにそう言おうとしてたね」

明らかに怪しすぎるカメダをジト目で睨む二人は、カメダがいつどんな行動が起こそうとも対処が出来るように準備する。

そして新たな世界での世界征服計画につまづきつつあるカメダは内心焦りながらもどうするか考える。

（仕方がないでやんす。たかが小僧と小娘如き口封じするでやんす！）

ポケットに手を突っ込んで二人に見えない様に遠隔操作のリモコンを握り締めて迎撃ボタンを押す。

ダブルオーガンダーの黄色い複眼センサーが光を宿した瞬間
それに気付いた小波はボールを振り被ってカメダへと投げる。

「ライティングボール！」

投げたボールは雷光を放ち、明らかに人間ではありえない球速でカメダの腹部に直撃する。

「うっ！？でやんす……………」

カメダのダースベイダーみたいなボディーマーを粉碎してガクツと俯いて気絶すると、ボールはダブルオーガンダーのコックピット内に転がる。

「やり過ぎじゃないかな？」

「大丈夫だろ、軟球で手加減もしたし」

気絶したカメダを心配そうに見つめる紗矢香を安心させる様に言うと、小波と紗矢香はコックピットに近付いて入る。

「怪しきは罰せよって落田父さんから言われてるからね」

「私も一応能力を使って、この人がドジを踏む様に確率を操作してたから大丈夫だと思うけど……………」

気を失っているカメダのポケットからリモコンを取り出した小波は

身体をシェイクされた様な気分の悪さと共に小波は目を覚ました。

最初に視界に入ってきたのは見知らぬ天井とこちらを覗き込む様に見えるロボットとバツタ人間。

ロボットの方は人型で昔の子ども受けアニメに出てくる様な、いかにもって感じの古臭いデザインをしており、顔の部分には単眼センサーと口のみがある。

そしてバツタ人間の方は緑色のライダースーツに黄色のスカーフという格好をしており、真正銘のバツタ顔の額にはV3と文字が入っている。

「お！起きたみたいだな坊主！」

ロボットが人間並みに饒舌に話しかけてくる。

「そうみたいでバツタ！博士に知らせてくるでバツタ！」

バツタ男が親しみのある笑顔で言うと、ドアを開けて部屋から出て行く音が聞こえた。

「……………ここは一体……………そうだ紗矢香は!？」

全てを思い出して勢いよく身体を起こすがロボットに押し倒される。

「まだ調子が悪そうだから寝てる。お前と一緒にいたお嬢ちゃんなら隣の部屋で寝てるぜ」

「そ、そうか……………良かった」

ロボットに彼女の安否を聞かされてほっとすると、小波は何が起きたのか聞く事にした。

「色々と聞きたいんだけどいいか？」

「おう！答えられる範囲でならな！」

「ここは何処なんだ？」

「ここは学園都市と呼ばれている場所の第7学区にある黒野研究所だ」

「学園都市？」

聞き覚えの無い単語に小波は首を傾げる。

「簡単に言えばここはお前さんが居た世界じゃなく異世界なんだよ」
話して聞かせるよりも見せた方が早いと踏んだロボットは、ハンド型マニピュレーターで起用にカーテンと窓を開けて外の世界を見せる。

そこでヒカルが見たのは、自身が住んでいた場所とは比べ物にならないほどの巨大都市だった。

今小波がいる場所は高いビルの上らしく、学園都市が遙か彼方まで見渡せる。

「ま、ようこそ学園都市へ」

ロボットが肩を竦めて言うが、小波はこれからどうしよう、と頭を
押さえて悩んでいた

プロローグ（後書き）

現在作者はパワポケシリーズを始めからやり直しています。 思えば
14年間長かったな。

第1話 超能力 (前書き)

色々と言いたい事が多いと思いますが。パワポケキャラは出来るだけ出したいです。

第1話 超能力

学園都市

東京西部に位置する完全独立教育研究機関。

あらゆる教育機関・研究組織の集合体であり、学生が人口の八割を占める学生の街にして、外部より数十年進んだ最先端科学技術が研究・運用されている。

また、薬物投与・催眠術・電気刺激など人為的な超能力開発が実用化され学生全員に実地されている。

東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る完全な円形の都市で、その総面積は東京都の約三分の一に相当し、総人口は約230万人。それぞれ特色のある23の学区から構成されている。

その内の一つである第7学区に悪の天才科学者、黒野鉄斎の秘密基地兼研究所は在った。

とある高いビル一つをそのまま改造しているらしく、ビルの中は研究施設に居住区や倉庫などがあり、メインの秘密基地は地下に在る。

そこで目覚めた二人は秘密基地の主と仲間に対面していた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

地下の秘密基地で小波と紗矢香はソファーに座り、テーブルを挟んで対面に座る三人　　ロボット、人間、バッタ人間と真剣な話をしていた。

それまでに自己紹介などで色々あったのだが、そこは割合させてもらおう。

「それじゃあ博士達は、三年前のあの日にこちらの世界に来たんですね？」

小波は向かいのソファーの中心に座る老人、黒野鉄斎に尋ねる。

頭のとっぺんが剥げた白髪頭に、右目に大きな義眼を着けた鋭い眼差し、皺が刻まれた強面に灰色のスーツの上に纏った黒マントはまさに悪の科学者を髻鬚ほういぶつさせる。

年齢は百歳に近いらしいが、まだまだ若々しい活力と覇気を感じさせる。

「うむ、三年前にワシらはジャジメントに囚われの身になっていたんじゃが、突如目の前に光の門が現れてのう。あそこに居ても利用

されて最後に始末されるのがオチじゃったから一か八かこやつらと一緒に賭けてみたんじゃ。そして門を抜けた先に出たのが学園都市だったんじゃよ」

当時の事を思い出しているのか、物憂げに黒野博士は緑茶を飲むと溜息を付く。

隣にいるロボット・たかゆきも同じ様に溜息を付いている。

どうやらよっぽど悲惨な状況だったらしい。

「俺はこちらに来てから生み出されたから当時の事はよく知らないでバツタ」

元の世界の事をあまり知らないバツタ人間・立花ボボV3は呑気に急須にお湯を入れて湯呑みに緑茶を足している。

何も知らないのは幸せな事だというのは本当みたいだな、と小波は気楽そうにしている立花を見て思った。

「三年前って言ったら、確かブラックホールズ戦があった時だよな」

三年前に起きた超常現象をよく覚えている紗矢香は当時の事を思い出しながら当時の真相を知る小波に聞くと、彼も真剣な表情で頷く。

「多分そうだと思うよ。当時ジャジメント会長のジオット・セヴェルスがドリームマシンを使って現実をフィクションに侵食させようとカラストロフを起こした時期だからな。その時に色々なアニメや漫画の世界と俺達の世界が繋がっちゃったんだよ」

当時の事を詳しく小波は三人に話す。

当時の事は『運命の三時間』と呼ばれ、今でも語り草となっている。世界中にアニメや漫画などにしかない怪物が出現して大惨事が起きた。

だがそれを食い止めたのは名も知れぬヒーロー達と子供達だった。

表では当時十二歳だった小波がエースを務めるビクトリーフィンチーズが世界大会決勝戦後に行われたフィクション達の連合チーム、ブラックホールズに勝利し。

裏ではブラックや茨木和那を中心としたヒーローチームがカタストロフの源であるドリームマシンを破壊するべくジャジメントの拠点に乗り込んで、ジャジメントの精鋭であるホンフーやエアレイドを打ち破り、何とかドリームマシンの破壊に成功した。

そしてジャジメント会長であるジオットは、小波がブギウギ商店街で知り合った謎のヒーロー・レッドとの一騎打ちに敗れ、カタストロフの頓挫と共に世界から姿を消した。

現実を生きる子供達がフィクションを打ち負かす事で人々の想いと現実の修正力が勝り、フィクションは消え去ったからだ。

そして当時魔球を投げる小学生として有名だった小波と井石は魔球や魔打法を失ってごく普通の野球児に戻った筈だったのだが……

何故か小波はまた魔球などが扱えるようになってしまった。

ホンフーやヒーローなど色々な人に相談してみたら、当時世界中で魔球や魔打法が扱える子供が現われたのはドリームマシンの力によるものらしいが、小波が魔球を投げたのはドリームマシン発動前であつた事が関係しているらしい。

つまり小波の力は生まれ持った天然物だったからだとか……。

「……ふむ。外でそんな面白い事があつたとは一生の不覚!! こちらの世界もそれなりに楽しいが、ワシも科学者の一人としてそれほど超常現象を是非この目で見たかつた!!」

語り終えて沈黙が流れているところを破つたのはやはり黒野博士だった。

ワナワナと震えていた所を突然立ち上がり、拳を握り締めて残念そうにしている。

「黒野博士、一応オレっち達もその超常現象で此処にいるんだぜ」

「それでバツタ! こちらの世界にはもつともつと凄い事があるかもしれないでバツタ!」

「それもそうじゃのう」

仲間二人に慰められて落ち着いた黒野は腕を組んでソファアに座る。

「それよりも私達は元の世界に帰れそうなんですか?」

一番聞きたい事を紗矢香は不安そうに尋ねる。

小波も紗矢香も元の世界に家族や友人が大勢いる。

こちらと向こうの時間の進み具合などは分らないが、もしこちらと同じ様に時間が進んでいるのなら大騒ぎになっているだろう。

そんな二人の不安を消し去る様に黒野博士は胸を張って自信満々に答えた。

「それについては心配ないぞい！お前さん達と一緒にやって来たメガネ坊主の技術とこの学園都市の技術にワシの頭脳が合わされば、元の世界に必ず戻してやる！」

「本当ですか!？」

「やったね！栄一さん！」

元の世界に戻れるという希望を貰って小波と紗矢香が喜び合って抱き合う。

その様子を見ていたたかゆきと立花が温かな眼でよかつたなど言っていると、黒野博士はこれからの話を始めた。

「さてと、まだ上で寝てるメガネ坊主は後にして、お主らはこれからしばらくこの学園都市で暮らさねばならぬから、色々やっってもらおう事がある」

「何ですか?」

「日用品の買い物と能力検査でバッタ！」

「それと学園都市だからお前さんらは学校に通わなきゃならねえんだよ」

二人の疑問に答えたのはたかゆきと立花だった。

「お前さんらはまだ高校生と中学生じゃろうが。戸籍の方はワシ自身が学園都市のトップとパイプがあるから何とかしてやるが、この街で若者が学校に通っていないのは色々と厄介な問題になる事が多い。じゃからお主らはこれから能力検査を受けて学校に通ってもらう。能力の方は二人共最初から生まれ持つておるようじゃからの問題あるまい」

ソファーから立ち上がると全員でエレベーターに乗って、上の能力検査室に向かう。

その途中に学園都市で研究されている超能力と、小波と紗矢香が持つ力について話していた。

「お前さんが持っている力は投げる物や持つ物に火や光などの属性を付与して常識外れの力を発揮する事で、お嬢さんの方は自身が願った事が起きる確率を変動させる事じゃったな？」

「はい、そうです。最初は光属性しか投げれなく、使える回数も限りがあつたんですけど、長年の訓練で全属性を使いたい時に使える様になりました」

「私も似た様なものです。『運命の三時間』が終わった後はしばらく徐々に能力が弱まっていたんですけど、栄一さんがまた魔球を投

ビルの上の階にある能力検査室に入った二人は黒野博士からこの学園都市における超能力について説明を受けていた。

「パーソナルリアリティーですか？」

普段聞かない単語に小波は首を傾げる。

どうやら紗矢香の方もよく理解できていないみたいだ。

「そうじゃな・・・簡単に言えばシュレディンガーの猫になるんじゃない。少々難しい話になるがこの学園都市では量子力学を超能力が発現する理論としており、能力者は『自分だけの現実』即ちパーソナルリアリティーよって能力を実現させている。例えば此処に一本のボールペンがある。」

黒野博士が胸ポケットから一本の黒いボールペンを取り出してみせる。

「これを此処にある何も入っていない引き出しの中に入れる。さて、此処には何が入っているかね？」

自分達に見えない様に部屋の端にある引き出しに黒野博士はボールペンを入れる

「ボールペンじゃないんですか？」

何を当たり前の事を聞いてるんだ？と小波は思いつつ言うが、

「違うぞい。ここに入ってるのは鉛筆じゃ」

「でもさっき入れましたよね？」

紗矢香が確信を持って聞くと、黒野博士は不敵な笑みを浮かべる。

「そう思うじやろう？じゃが、もしかしたらわしが入れたフリをしていたり嘘を付いている可能性がある。ボールペン50パーセント、鉛筆50パーセント。開けて確認してみなければはつきりと分らん。そしてこの中に別の物が入っていると思っただ者がいたらどうなる？そしてその可能性を信じてソレを手に入れたら？」

黒野博士の説明に大体理解できた二人はこの世界の超能力とはどういうものなのか知る。

「まともな現実から切り離され、自分だけの現実を手に入れた者を此処では超能力者と呼ぶ。まあ、ワシからしてみれば脳開発で起こる人為的な脳障害みたいなものじゃ。」

あまり興味無さそうに言うが、黒野博士の眼に映る二人に対しては興味深そうにしている。

「そしてこの世界にはお主らと同じ様に自然に能力へと目覚めた者もいる。そやつらの事を此処では原石と呼んでおる。お主らはこの世界では五十人前後しか確認されていない原石じゃ。特にお嬢ちゃんの方は高レベルの能力者の可能性が高いからのう」

「こちらにも超能力のレベルがあるんですか？」

超能力のレベルの話をして小波はフィンチーズのファーストだった少女・上守阪奈を思い出す。

世界滅ぼすほどの圧倒的力を秘めた世界最強の超能力者ピースメーカー
カー エントロピーを操る彼女の力は星をも滅ぼせる生きた核兵器そのものだ。

だがコントロールが一切できずに幾つもの研究所を消した為に封印されていた所を元ツナミグループ会長・神条紫杏の極秘命令により、当時紫杏の秘書だった上守甲斐と世界最強の第三世代サイボーグ犬井灰根によって不器用ながらも愛されて育てられた少女。

現在は自身の力を少しずつコントロール出来る様になって、ヒーローの一人として世界中で人助けをしている。

そして今でも野球を続けてファーストをしている。

「分かりやすく言つとじゃな・・・おい！ちよつとアレを持って来い！」

「了解でバッタ！」

黒野博士が言つと立花が敬礼して能力検査室を駆け足で出て行く。

どうやらアレで解るほど彼らの絆は深いみたいだと二人は感心した。

そしてすぐに立花は大きなホワイトボードを持って戻って来て博士の横に置くと、黒野博士は簡単にレベルなどについて簡単に書き始める。

無能力者（レベル0）

測定不能や効果の薄い力。

低能力者（レベル1）

スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力。

異能力者（レベル2）

レベル1とほとんど変わらない程度の力。

強能力者（レベル3）

日常生活において活用可能で、便利と感じる力。

大能力者（レベル4）

軍隊において戦術的価値を得られる程の力。

超能力者（レベル5）

単独で軍隊と戦える程の力。

絶対能力（レベル6）

「神の領域の能力」。

「そして最後に超能力者達最後の到達地点である『SYSTEM』、神ならぬ身にて天上の意思に辿り着く者。これを入れればレベルは全部で八つ何じゃが、この都市の表で認知されているのは超能力者（レベル5）の七人までが最高レベルじゃ」

そして次に黒野博士は現在確認されている超能力者（レベル5）の序列・能力者名・能力名を書く。

それを小波と紗矢香は興味深そうに見た。

第一位・一方通行（本名不明）

アクセラレータ

・一方通行

- 第二位・垣根帝督・タークマター未元物質。
- 第三位・御坂美琴・レベルガン超電磁砲。
- 第四位・麦野沈利・原子崩し（原子崩し）。
- 第五位・食蜂操祈・メンタルアウト心理掌握。
- 第六位・不明・不明。
- 第七位・削板軍霸・名称不明。

何故か不明の部分があるが、特に気にするような事ではないと言われて気にするのをやめた。

「絶対能力者（レベル6）は居ないんですか？」

「………現在のところは居ないな。超能力者（レベル5）を保有している研究所は絶対能力（レベル6）を生み出そう躍起になって馬鹿な事ばかりしておるが、表では上手くいかず認知されておらん」

「表では？」

表では認知されていない？

ならば裏では絶対能力（レベル6）が居る事になる。

怪訝な顔で博士を見るが、博士は顎に手を当てて考えると、

「とりあえず今から能力検査をして終わってから話そう。ウチの研究所に所属している能力者達についてもな……よし、お前さんだけこっちに来い」

黒野博士に付いて行って小波は能力検査室の奥の部屋に入る。

中には色々な計測器具が置いてある縦長に広い部屋だった。

「まずはお前さんの能力検査からじゃ、そこにワシの助手が野球の硬球を用意しておいたから、ソレを思いっきりワシの言う通りに投げてくれ」

そう言うと黒野博士は部屋から出て行くと、突如博士が出て行った方の部屋の壁が全てクリアになる。

お互い声は聞こえないが、しっかりと様子が見える向こうの部屋ではさつき出て行った黒野博士と左眼に黒い眼帯を着けた見知らない一人の少年が紗矢香達と共に小波の能力検査を見ている。

博士の仲間か助手か？と思ったが後で聞けばいいと思って目の前の事に集中する。

すると部屋のスピーカーから博士の声が聞こえてきた。

『これよりお前さんの能力テストを行う。まずは普通に本気でアレに投げてみてくれ』

博士が言い終わると、小波から十メートルほど離れた位置にネットみたいな物が現われる。

「そういえば、近頃どれだけスピードが出るのか測っていなかったな。丁度いいから測ってもらおうか！」

野球の硬球が沢山入ったカゴからボールを一つ取ると、小波は肩慣らしに肩を回してから振り被って全力で投げた。

一筋の流星の如く空を走る硬球はネットのど真ん中に命中すると、奥へと伸びていき、最後にはボールを押し戻した。

どうやらあのネットは受け止めた物の力を測って押し戻す緩衝材みたいな働きがある様だ。

『球速157キロじゃな。まだ高校一年じゃというのに大したもんじゃ』

『当然だよ！栄さんは私のヒーローなんだから！』

紗矢香の自慢気な声が聞こえて思わず恥ずかしく思うが、それはそれで小波は前に測った155キロを更新できてほっとしていた。

『次は魔球を頼む』

「はい」

返事を返すと小波はカゴからボールを取って振り被り、頭の中でボールに力を全て込める様にイメージを行い、手に光や力が集まっていく様な感覚を感じながらいつものフォームでボールを投げた。

手からリリースされた硬球は光線の様に真っ直ぐな軌跡を残してネットのど真ん中に当たる。

普通ならまた押し返されて終わる筈なのだが、今回は普通ではない。ネットに突き刺さったボールは貫通してその向こうにある壁へと突き刺さった。

「えっ？」

想像以上の破壊力に思わず小波は啞然とした。

元の世界ではどんなに力を込めてもあんな事にはならなかった筈なのだが……………。

『球速測定不能じゃ』

能力検査室に黒野博士の声が響いた。

第1話 超能力 (後書き)

近い内に全て改稿してみようと思います。
前に投稿した時に小説じゃなく台本だといわれましたので。

第2話 学園都市（前書き）

主人公の三人のメガネパパ達を出そうと思っ
てますが、どう思いま
すか？

第2話 学園都市

能力検査を終えた小波と紗矢香は黒野博士から能力検査の結果を聞いていた。

「お前さんが強能力者（レベル3）でお嬢ちゃんが超能力者（レベル5）じゃな。後でちゃんと申請しておくからもうええぞ」

黒野博士がさつき探った能力検査の書類を見ながら言うが、小波と紗矢香は能力検査で見せた自分の力について考えていた。

自身が今まで使ってきた魔球や魔法は信じられない位に威力が上がっている。

もし人に向かって投げたら殺しかねない。

小波は能力テストを行った部屋の端の壁にめり込んでいる幾つ物ボールと、魔法によって粉々に砕かれた緩衝材を見て思わず震えた。

「……………栄一さん」

いや、自分の力など大したものじゃない、と思いつつ紗矢香を見る。

彼女は自身の力に不安を感じているのか顔を曇らせている。

能力テストで見せた力は元の世界のソレを遥かに超えていた。

紗矢香の能力は『自身の願った事が起きる確率を変動させる』という人が生まれ持つ運勢を操るものだ。

元の世界では宝くじや福引きなどで一等を確実に当てたり外したりなどができたが、それらは彼女の能力の副産物にすぎない。

彼女の本領は願った事が確率で超常現象でも起きる事だ。

かつて彼女は世界の危機に自分と共に立ち向かってくれるヒーローだと小波の事を信じて一緒に平和な街の中を探検している時に『本物の化け物が現われればいいな』、と思った時に本当に二人の前に化け物が現れて小波は全治八週という大怪我を負った。

原因が自分の力のせいによるものと解って彼女は罪悪感で沈み込んだが、小波の熱意によって再び超能力の訓練を始めた。

その結果、彼女は自分の意思で超常現象を起こせるまでになった。

『運命の三時間』の後は徐々に能力が弱まっていたが、小波が再び魔球を投げた時期辺りから彼女の力も徐々に戻っていき、現在は自身の思うままにコントロールできるが、無意識の内に使っている事がある為にブレスレット型のESPジャマーを常に着けている。

そして、こちらの世界に来て能力検査を試みたが紗矢香の超能力はこちらで言う超能力者（レベル5）だった。

どんなに複雑なクジであろうとも任意に大当たりを引き当て、目の前で超常現象が起こる確率を上げる事でブラックホールが現われたり、空間がひび割れたりなどした。

実験で元気なモルモットが今すぐ死ぬ事を願って確率を上げたら、モルモットは突如心臓停止して死んだ。

もはや運命干渉系の超能力だ。

どんな強い敵であろうとも運が無ければ生きていけず、寿命や病気には勝てない。

思った相手の死ぬ確率を上げてやる事で彼女はどんな相手だろうと殺せる。

モルモットが死ぬ瞬間を見た時の彼女の血の気が引いた顔は忘れられない。

そんな二人を見ていたたかゆきと立花は顔を見合わせると頷いた。

「ところで能力名はどうするんだ？」

「それでバッタ！折角の能力でなんだから名前を付けるべきでバッタ！」

暗くなっている二人の話題を変えようと話しかけるロボットとバッタ人間。

二人の心遣いに気付いた小波は感謝しつつ話に乗る。

「そうだな・・・なんかかつこいい名前はないかな？」

紗矢香に話を振ると、戸惑いながら必死に彼の能力名を考える。

「え、えくと・・・エレメントフォーム属性球児とかいいんじゃないかな？」

「うん・・・ちょっとありきたりなネームでバツタ」

「別にシンプルでいいんじゃないか？なあ、坊主？」

「うん。確かに色々な種類の属性が使えるからな。俺は良いと思うよ」

特に自分でも良い能力名が思い浮かばない小波は彼女が考えてくれた属性球児を自身の能力名にした。

「そこで次は嬢ちゃんの能力名だな」

「学園都市のトップ8になるんだからカッコいい能力名を考えるでバツタ！」

「確か他の超能力者（レベル5）って超電磁砲とか一方通行とかだつたよな・・・」

ついでさつき教えてもらった超能力者（レベル5）の能力名を思い出しながら小波は紗矢香の能力名を考える。

すると書類の整理を終えた黒野博士がやって来て、

「運命掌握ファミリアタルというのはどうじゃ？フランス語で運命の女という意味じゃが」

「あ、それ私にぴったりかも」

「確かにいいんじゃないか？」

「カツコイイでバツタ！」

紗矢香は自嘲気味に微笑みながらファミフアタル運命掌握を自分の能力名にしよう
と思った。

ファミフアタル フランス語で「運命の女」。または、男を
破滅させる魔性の女。

男連中はその意味を知らずにそれでいこうなどと言っていて、彼女の
の内心に気づく事は無かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

能力検査を終え、小波と紗矢香は学園都市の街で日用品の買い物
をしていた。

『 戸籍の用意や入学する学校の手続きはこちらでしておくから買
物に行つて来るといい 』

そう言つて気前よく学園都市の貨幣が沢山入った財布を渡してくれ
た黒野博士には足を向けて寝られないな、と小波は素直に感謝して

いた。

ちなみに隣で手を繋いで歩いている紗矢香は神桜女学院中等部の制服だが、小波はいつも着ている白と赤の野球ユニフォームではなく、博士の助手を名乗る黒い眼帯を着けた少年が用意してくれた服を着ていた。

『制服ならともかく、野球ユニフォームなんかで出歩く不審者なんか学園都市にはいねえぞ』とロボットのたかゆきに言われてご尤もだと認めざるを得ない。

今の小波の服装は白と赤の長袖シャツに白いズボンと赤いジャケット。

頭には自身が通っている高校の野球部の野球帽を被っている。

自身が着ていたユニフォームと似た配色の服を用意してくれたのは、用意してくれた少年の気遣いだろう。

それでも今まで人生の大半を野球ユニフォームで過ごしてきた小波にとつて、私服というのは極めて新鮮に感じるが何故か落ち着かなかった。

「どうしたの栄一さん？」

隣を歩く彼の落ち着きの無さに気づいた紗矢香が不思議そうに小波を見つめる。

「いや、ユニフォーム以外の服なんて滅多に着ないから落ち着かないんだよ……」

「あ、確かに私服姿なんて初めて見たかも」

紗矢香自身も三年以上の付き合いだが、彼の私服姿を見た事が無かった。

何でも彼の父親の一人が「何事も形から入るのが当たり前でやんす！」と言って野球ユニフォーム以外着せて貰った事が無いと言っていたが、改めて彼の家がどれだけ異常だったのか分かる。

「それにしても、黒野博士って怖そうなお見してるけど善い人だよな」

「そっだよな、初めて会った時に私って悪の組織に捕まったんだと本気で思っちゃったもん」

二人は黒野博士達と初対面した時の事を思い出す。

「ワハハハハ！ようこそ我が秘密基地へ！この世の真理を探求せんとする悪の天才科学者、黒野鉄斎とはワシの事よ！」

「オレの名前はたかゆきってんだ！よろしくな！」

「俺の名前は立花ボボV3っていうのでバッタ！以後よろしくでバッタ！」

種族が違い、個性の強過ぎる三人。

恐らく彼らとの出会いは一生忘れる事は無いだろう。

「そついえば・・・もう何人か仲間が居るつて言つてたよな？」

秘密基地から出る直前に小波は博士から『帰つたらワシの家族と仲間を紹介するぞい』と言う言葉を思い出して紗矢香にも確認のため聞いてみる。

「名前とかはまだ聞いていないけど、あの黒い眼帯の人が言うには後二人いるんだつて」

「後二人もか・・・多分博士の仲間だから変な個性が強いんだろうな」

「あははは・・・恐らくね」

なにセロボットに怪人がいるのだ、もしかしたら魔法使いやモンスターが居てもおかしくないかもしれない。

「それにしても本当に学園都市なんだな・・・若い学生ばかりだ」
道ですれ違う人などを見るが、大人が少なく制服を着た子供が多い、と小波は思う。

「本当だよね、清掃ロボや警備ロボが所々にいるし。私達の世界と同じ位に科学が進んでるんじゃないの？」

紗矢香は街の所々に居るドラム缶みたいな形状のロボットを見て小波に聞くが、小波は首を横に振った。

「いや、少なくとも科学力は俺達の世界の方が少し進んでるよ。超能力はともかくとして、世界のエネルギーバランスを変えたワギリ

買い物も大体終わって、日も暮れてきた。

街中には下校する学生などが見える中、小波は公園でベンチに座ってくつろぎながら紗矢香を待っていた。

これから学園都市で暮らしていくうえで必要な日用品を買い終えたのだが、その際に店から福引券を数枚渡されたのだ。

自分の力を試すには丁度良いと思って紗矢香は、今日一日荷物持ちをしてくれた小波に此处で待っている様に言って福引場へと向かった。

『絶対に大当たりを当てて来るから待っててね!』

自信満々に言った彼女の事だ、間違いなく特等か一等を当ててくるだろう。

そう思いつつ小波はスーパーで買った紙パックのムサシノ牛乳を呑気に飲んでいた。

「何か身体を動かしかないと落ち着かないな」

手で野球の硬球を弄びながらこれからの練習とかどうしようとか小波は考える。

元の世界では野球部での練習は勿論、実家でのカンフー映画みたいな練習場があったおかげで野球の練習には困らなかった。

だが学園都市には持って来た野球道具と着ていた練習着しかない。黒野博士に何か作ってもらおうかな、などと危ない事を考えているときだった。

「 ええい！ちくしょう、不幸だ〜っ！！」

という若い男の大きな嘆き声が聞こえて小波は振り向くと、黒い学生服を着たツンツン頭の同い年位の少年が柄の悪そうな輩達に追いかけられている。

その数は実に八人。

少年は逃げ足も速く逃げ慣れているのか男達は捕まえる事が出来ずにいる。

だが、柄の悪い輩の数は揃っているのだから当然捕まるのも時間の問題である。

すぐに回り込まれた少年は柄の悪い連中に取り囲まれた。

恐らくあのままだとリンチされるだろう。

「しょうがない。どっちが悪いのか確かめてから助けてやるか」

ベンチから立ち上がって、飲み終わった牛乳パックをゴミ箱に捨てると小波は拳を鳴らしながら少年達の元へと向かった。

「へへへへ。ようやく追い込んだぜ」

「お兄さん達、ちょっと小遣いに困ってるからお金くれたら許してあげるかもよ」

追い込んだ獲物に対して絶対的な優位を感じている男達は上条を見下した目で見て言う。

だが上条は開き直った様に堂々と男達にビシッ！と指を突きつけて言い放った。

「誰がお前らなんかやるかよっ！金が欲しいんならアルバイトでもして手に入れるよ！上条さんにはな、弱い奴から金を巻き上げよ」とする捻くれた奴らに渡す金なんか無いんだよ！」

(あいつ言うな〜！？)

影で上条の堂々とした姿を見ていた小波は今時珍しい正義漢だと感嘆しながら内心拍手しつつ彼らに近付いた。

「そいつの言う通りだ。金が欲しいんならちゃんと働いて自立してから言えよ」

突如現われた少年を上条は怪訝な顔で見る。

赤いジャケットに白いズボンの同年代位の少年。

頭には白赤の野球帽を被り、短く刈った黒い短髪に強く熱い意思を感じさせる眼差しをした、それなりに整った顔立ち。

背は170後半位で高く、スマートだが引き締まった体をしている。

「なんだてめえは？」

「こいつと同じ正義の味方気取りか？」

柄の悪い輩達全員の目付きの悪い視線が小波に集中するが、小波はこの程度の奴らに物怖じする男ではない。

生まれてすぐに三人の父親から野球にあまり関係ない様な英才教育を受けており、父親の中でも武闘派の落田からは喧嘩の仕方などを教わっている。

おまけに十二歳の時に真正正銘の殺し合いに自ら参戦して、ジオットの部下である第四世代サイボーグ・マゼンタやジナンダに殺され掛けた事もある。

余談だが中学生の時に行われた野球の合宿で、合宿地の小森寺ではなく少森寺という『漢たちが己の精神と肉体を極限まで鍛え上げる地上最強の場所』に間違っって入ってしまい、四十日の修行を無理矢理課された事もある。

その際に寺門男を始めとした師匠達にしごきにしごかれ、最終日に行われた少森寺八連闘を命懸けでクリアして生還した。

それを聞いたホンフーから野球をやめて弟子にならないかと言われた事すらもある。

勿論断つたが。

まあ、単刀直入に言えば小波はたかが不良程度に負ける事はない。

「俺はあの人達と違ってヒーローなんて大層な存在じゃない」

ヒーローという言葉は世界中で影から人助けをしている阪奈やブラックさん達に相応しい。

「俺はただの野球少年だ」

不敵な笑みを浮かべながらそう言うと小波は動いていた。

先手必勝！相手が反撃する間も与えない。

両手両足を思いっきり使って蹴って殴って、一人一人を確実に一撃で戦闘不能にしていく。

全員が倒れるまで十秒も掛からなかった。

「おい！誰か来る前にズラかるぞ！」

余りの強さに上条は呆然としていたが、声をかけられてすぐに我に返った。

「お、おう！ありがとな！」

上条はその場から立ち去ると、小波も紗矢香が待っているかもしれない公園へと戻っていった。

福引のお姉さんがしょんぼりとする少女に残念そうに声を掛けると、少女は福引場からとぼとぼと去って行こうとするが、紗矢香は苦笑しつつ少女の腕を取った。

「ちょっと待ってください。これから私が福引をするんですけど、もしかしたら引き当てちゃうかもしれないので、その時は貰ってくれないませんか？」

「え、いいの？」

頂垂れていた少女は顔を上げて紗矢香を見る。

「はい、勿論！」

紗矢香は笑顔でそう言いつと福引券を二枚、福引のお姉さんに渡す。

少女が期待を込めて見守る中、紗矢香は右手首に着けたブレスレット型のESPジャマーをOFFにすると自身が五等を引き当てる確率を念じる事で極限まで高めて福引のガラガラを回す。

三回転させた時だった。

ガラガラから赤い玉が出てくる。

赤い玉は五等、すなわち景品は少女の求めるゲコ太抱き枕。

それを見た福引のお姉さんは「当たりです！」鈴を鳴らし、少女は喜びのあまりに紗矢香に抱き付いた。

「やったあ〜っ！ありがとうございます！」

「いいえ、運が良かっただけですから」

こうして少女は目的の品を受け取り、紗矢香は次の福引で二等の豪華絢爛すき焼きセットを引き当てた。

「本当にありがとうね！あ、そうだ自己紹介がまだだったわね、私は御坂美琴。常盤台中学の二年生よ」

茶髪の少女、御坂美琴は機嫌良さそうに自己紹介すると、紗矢香と握手する。

「私の名前は天月紗矢香です。紗矢香って呼んでください。今度常盤台中学に転入する事になっている一年生です」

「なら私の後輩ね！何か困った事があったら何でも言ってね、このお礼は必ずするから！」

美琴が握手しながら軽くウインクすると、紗矢香は微笑みながら頷いた。

「はい、宜しくお願いします御坂さん」

「それじゃあまたね！」

手を振って去って行く美琴を見届けると、紗矢香は景品を持って小波が待つ公園へと嬉しそうに笑顔を浮かべて戻って行った。

第2話 学園都市（後書き）

主人公と紗矢香が強すぎると思いかもしれませんが、これ位じゃないとチート共相手に生き残れない様な気がします。

それと今の時期ですが、上条や御坂が進級したばかりの春です。

第3話 黒野ファミリー（前書き）

オリキャラを何人か出します。

理由は原作キャラと違って殺したい時に都合よく殺せるからです。

それと小波がレベル3なのは作中で徐々に説明していきます。

第3話 黒野ファミリー

「ただいま」

「今戻りました」

「お帰りでバツタ！」

秘密基地へと続くエレベーターから出て挨拶をすると、二人を待っていたのか立花が迎えてくれた。

日が暮れて、空に月と星々が見え始める頃に二人は黒野博士の秘密基地へと戻った。

第七学区のとあるビルの地下に作られた自称 悪の秘密基地

は一見して何処にでもある無機的な広い地下倉庫に家具などを始めとした電化製品が置かれているだけのプライベートルームに見えるが、部屋の四隅にパスワードと特殊なカードキーが無ければ開けられない頑丈そうな自動扉があり、その向こうにはたかゆき曰く黒野博士のラボラトリー、武器や食料などがある倉庫、秘密の脱出口、気分転換の娯楽室があるらしい。

そしてこの秘密基地に入るのも、博士から渡されたカードキーと教えられたパスワードが無ければ入れない様になっている。

「さあさあ、とりあえず荷物を適当な場所に置くでバツタ」

「ありがとう、立花さん」

「どうぞ致しましてバツタ」

手に持っていた買い物袋を渡しながら紗矢香は親しく手伝ってくれる立花に礼を言うと、立花は穏やかに笑顔で返す。

出会ったばかりの当初は初めて見るバツタの怪人にどう接しているのかわからなかったが、彼の親しげな優しさを知ると共に普通に接する事が出来るようになっていた。

「博士とたかゆきはどうしたんだ？」

秘密基地の中に二人の姿が無い事に気付いた小波が立花に聞くと、

「たかゆきの奴なら博士の頼みで二人が通う学校に書類を渡しに行ってるでバツタ。それで博士は今、生徒会長リーダーと一緒にこの学園都市で一番偉い人に会いに行ってるでバツタ」

「リーダーって誰だよ？もしかして俺に服を用意してくれた眼帯の人か？」

博士と一緒にという言葉で小波は博士の助手を名乗っていた、黒い眼帯を左眼に着けた少年を思い出していた。

すると、立花はコクリと頷いて肯定する。

「そうでバツタ。あいつがこの学園都市にいる学生の頂点に立つ生徒会長でバツタ！みんなからは生徒会長と書いてリーダーと呼ばれているカッコイイ男でバツタ！」

この学園都市にいる生徒の頂点に立つ男。

そう言われると二人は納得した様に呟いた。

「そう言われればそんな感じの人だったよね」

「確かに……あいつが生徒会長か……」

小波は初めて彼と会った時の事を腕を組んで思い出す。

服を持って来た。サイズは少々大きめなのを選んだからそんなに悪くない筈だ。

たった一言だけ穏やかな表情で言って、目の前から去って行った同年代位の少年。

ストレートの黒髪に、左眼に黒い眼帯を着けた真っ直ぐで理知的な隻眼。

男前に整った顔立ちに、小波よりも背が高く引き締まった体付き。

堂々とした佇まいからは同年代とは思えないほどの頼りがいを感じさせられた。

「また会ったら服の礼を言っておかないとな」

「それならもうじき博士と一緒に帰って来る筈でバツタ」

「なら、その時にでも言うか」

小波はそう決めると一人呟いて近くにあったソファアに座った。

「そういえば、ここの皆さんは食事をどうしてるの？」

何を食べているんだろう？と疑問に思った紗矢香が立花に聞く。

見た目で判断してはいけないと思うが、黒野博士を始め、たかゆきや立花には料理なんか出来る様には見えない。

もしかしたら、あの生徒会長が作っているのだろうか？

紗矢香はこれまでの事からそう思っていると、立花は人差し指を立ててチツチツチツと口で鳴らし、

「博士の娘さんが全てやってくれてるでバツタ。だから安心してバツタ」

「黒野博士に娘なんていたのか？」

「お孫さんじゃなくて？」

初めて聞いた事に小波と紗矢香が疑問に思いながら聞くと立花は頷いて肯定する。

「少しちよつと違うでバツタ。博士には元の世界に息子達しかいないのでバツタ。こちらの世界で博士が拾って育てている義理の娘でバツタ」

「……ふん」

立花の説明に納得した二人だが、すぐに驚く物を見せられる。

「ちなみにこれが博士の息子達でバツタ」

立花が近くにある本棚から一冊のアルバムを取り出すと、その中から一枚の写真を抜き出して小波に手渡して見せる。

どれどれ、と二人は興味深く写真を見ると、思わず我が目を疑う様なものが写っていた為、一度目を腕で擦ってからもう一度凝視するが間違いない。

写真は学校で撮る様な集合写真みたいになっており、写真の中央に今とあまり変わらない黒野博士がいて、周りに野球のユニフォームを着た博士の息子達が一列十人で四列に並んでいる。

すなわち博士の息子は四十人近くいることになる。

どんだけ子供がいるんだよ！？と普通なら驚いて思うかもしれないが、小波と紗矢香が真に驚いているのは、

「何で同じ顔が四十人もいるんだよっ！？」

予想外の事に思わず叫ぶ小波。

横から覗き込む様に見ている紗矢香も眼が点になっている。

「ちなみに博士の息子の長男、次男、四男は夏の甲子園で優勝した事があるそうデバッタ！」

「マジかよっ！」

自分の事の様に誇らしげに語る立花の言葉に小波がまた驚く。

「本当でバツタ。これが証拠でバツタ」

再びアルバムから一枚の写真を抜き出して小波に見せる。

証拠を見せられた小波はそれを見て信じざるを得なかった。

そこに写っていたのは夏の甲子園で全国制覇を果たした日の出高校の野球部員達。

甲子園のグラウンドで泥だらけになりながらも、みんなが輝かんばかりの笑顔を浮かべている。

そして黒野博士の同じ姿をした三人の息子もその中にはいた。

だがさらに驚く事があった。

よく見ると小波はこの写真を見た事がある。

「これって栄一さんのお父さんだよね……………」

紗矢香が写真に写るメガネ少年を指差す。

「うん。間違いなく山田父さんだね」

指差した先には小波の三人いる育て親の一人である若かりし頃の山田平吉が写っていた。

それだけではなく、何度も会った事がある人が何人もいる。

例えば山田父さんの妹の夫である元プロ野球選手を始め、元ジャジ

(レベル4)である空間移動テレポートがなければ出入りする事もできない最高の要塞だった。

そんな、核シエルターを優に追い越す強度を誇る演算型・衝撃拡散性複合素材(カリキュレイト=フォートレス)のビルの中に、黒野博士と学園都市に存在する全生徒の頂点に君臨する生徒会長の姿があった。

室内と呼ぶにはあまりにも広大な空間には、一切の照明がない。

それなのに部屋の中は星のような光に満たされていた。

部屋の四方の壁を覆い隠すように設置された無数のモニターやボタンが瞬く光である。

大小数万にも及ぶ機械類からはさらに数十万にも及ぶコードやケーブル、チューブ類などが伸びて、血管の様に床を這い、それらは全て空間の中央へと集まっていた。

部屋の中央には巨大なビーカーがある。

直径4メートル、全長10メートルを越す強化ガラスでできた円筒の器には、弱アルカリ性培養液を示す色彩の赤い液体が満たされている。

そのビーカーの中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さまに浮いていた。

銀色の髪を持つ『人間』は男にも女にも見えて、大人にも子供にも見えて、聖人にも凶人にも見えた。

その『人間』の名はアレイスター・クロウリー。

この学園都市のトップに君臨する統括理事長である。

生命活動を全て機械で補い、計算上は一七〇〇年にも及ぶ寿命を持つとされる男と向かい合う形で黒野博士と生徒会長リーダーは二人の人間と対面していた。

二人が此処に来るのは慣れた事で、今更物怖じをする必要が無い位に堂々としているが、みんなから生徒会長リーダーと呼ばれる男の腰には一本の刀を帯びていた。

その理由はビーカーの傍らに佇んでいる一人の黒いフード付きの外套を纏った黒尽くめの男にある。

外套のフードを深く被っていて顔の全体像は見えないが、東洋系の口許をしている事から日本人であると思われる。

黒野博士や生徒会長リーダーにとってはビーカーの中に居る奇異な人間よりも遥かに危険な人物だと嫌でも感じるしかなかった。

それほどまでに男の存在は邪悪だった。

その姿から醸し出される悪意に触れているだけで頭がおかしくなりそんな錯覚すら覚えるほどの何かを男は無意識に発している。

それが何なのか黒野博士と生徒会長リーダーには分からないが、とてつもなく不愉快に感じる。

「 此処に来た用件は分かっている。また随分面白い者達がやって来たものだ・・・」

「ならば、あやつらはワシの研究所所属の能力者という形で保護させてもらうぞ」

「・・・ふむ、別に構わない。プランには何の障害も無いし、もしあったとしても僅かな誤差で済む。・・・それにしても実に興味深いものだ。あの少女の運命掌握ファミリアタルといい、あのロボットとメガネの男の技術といい、もし私自身が自由に動けるならば自ら調べたいものだ」

新しい玩具を見つけた子供の様にアレイスターは喋ると、黒野博士は怪訝な顔になる。

それを見たアレイスターは口許に軽い笑みを浮かべ、

「 安心するといい。君と私の仲だ、お互いが交わした契約を破らない限りは 」

「わしとお主は同志という事じゃな」

お互い人の悪い笑みを浮かべるなか、生徒会長リーダーはビーカーの横に佇む男に注意を向けていたが、黒尽くめの男は何も喋らずに口許に歪んだ笑みを浮かべて生徒会長リーダーを見ていた。

まるで頭の中で嫌な事を想像されている様な気がして、不愉快に感じる。

今すぐにも問答無用で斬り殺したい衝動に駆られるがそれはでき

ない。

奴はまだ自分に何もしていないのだから。

「それではこれからもお前さんの障害にならん程度に遊ばせてもらうぞ」

「構わない。君はこの学園都市にいる科学者達の中でも極めて優秀な男だ。また面白い発明品を期待している」

いつの間にか話し合いは終わっていたらしく、去って行く黒野博士の後を追う様に生徒会長は続く。

その時だった。

「面白い左眼を持っているようだな」

今まで黙っていた男が生徒会長に話し掛ける。

立ち止まり、その空間に全員が注目する中で生徒会長は特に気にした様子も無く、

「羨ましいか？」

と左眼の眼帯を指差しながら黒尽くめの男に聞く。

いや、と男は答えると、黒野博士と生徒会長は何も言わずに去って行った。

二人だけ残された静かな空間に沈黙が漂うなかで男は肩を竦めると、

今晚の夕食は紗矢香が福引で当てた豪華絢爛すき焼きセットがある事からすき焼きを作っている。

キッチンからすき焼きの良い香りがしてくるなか、小波と立花はただ待っているのも悪い気がして秘密基地の掃除をしていた。

「ふう〜。これでいいバツタ」

「少しは綺麗になつたな」

一通り掃除機で掃除し終えた二人は満足気に辺りを見回す。

「俺は食事の準備をするから小波は七階の居住区の二〇二号室にいる博士の娘とメガネの二人を呼んできて欲しいでバツタ」

「分かった。ちょっと行って来る」

立花に頼まれて、エレベーターに乗り込んで七階に向かい、二〇二号室の前まで来た小波はドアをノックする。

すると中から。

「開いているから入って来て下さい」

と女性の声が聞こえて、小波は失礼しますという中に入る。

まるで病室みたいな部屋の中にいたのはベッドの上で体を起こしている中年のメガネ男・カメダと白く華美なデザインの着物を着た高校生位の少女だった。

カメダの方は元の世界で見たダースベイダーみたいなコスプレの服ではなく、若草色のパジャマを着ている。

そして部屋に入ってきた小波を見た瞬間、驚いた様に指を差し、

「あっ！？お前はあの時の危険球野郎でやんすね！？」

カメダが驚いて敵意を表しているが、小波は別の事を考えていた。

世の中自分に似た人間は三人いると言われているが、ウチの父親達は知っているだけでも五人以上はいる。

父親達とそっくりの聞き慣れた声を聞いて何故か落ち着く事に気付いた小波はホームシックかなと思った。

「とりあえず聞きたい事は色々あるけど、下で晩御飯の準備ができたから降りて来てくれだつてさ」

敵意？き出しのカメダとベッドの傍らにある椅子に座っている博士の娘らしき少女に言われた事を伝える。

すると、真っ直ぐなセミロングの茶髪に優しい眼差しをした清楚で可愛い少女は立ち上がって礼儀正しく自己紹介を始めた。

「どうも始めまして、小波栄一さんですね。ミサカは黒野博士の娘で黒野ミサカと言います。どうぞ見知り置きを」

「あ、どうも」丁寧に

礼儀正しく一礼するミサカに小波も見習って一礼を返す。

「おいらを無視するなでやんす！」

無視されて手元にある枕を小波に投げつけるが左手であっさりキャッチされる。

「それだけ元気なら何でも食べそうだな。立てないなら手を貸そうか？」

妙な事になったのも全てコイツのせいだが、自分の父親に似ているせいか妙に親近感を感じて、小波は親しげに接するが、

「ええい！お前の手なんて借りないでやんす！」

初対面に魔球でデッドボールを食らわせた事に腹を立てているらしい。

カメダはベッドから立ち上がると、ズンズン、と力強く床を踏みながら部屋の外に歩いていこうとするが、

「何処に行けばいいんでやんすか？」

とミサカに恥ずかしそうに尋ねた。

その様子を見た小波は父さんそっくりだと苦笑し、ミサカは口許に微笑を浮かべる。

「カメダさんは秘密基地に向かう為のカードキーも無く、パスワードも知らないからミサカが案内致します」

ミサカがカメダの左手を取ると歩き出し、カメダは自分の手と手を繋ぐ少女の手を見て感激していた。

(うおおっ！？女の子自ら手に取ってもらえるなんて夢みたいでやんす！！)

彼の人生は敗北と失敗の歴史で埋め尽くされている。

とあるファンタジーの世界では勇者に敗れ、とある忍者達がいる戦国時代の世界では忍者どもに敗れ、とある宇宙連邦がある世界ではとあるスペースキャプテンに敗れた。

その他数々の世界を渡り歩いたが、いずれも敗れて失敗した。

そしてどの世界でもカメダは小波に似た男に敗れてきた。

カメダが小波を敵視しているのはそのせいである。

そんな敗北と失敗の人生を送って来た彼は、何気に親しい女性関係が一切無かった。

そんな彼の前に現れた少女の優しさにカメダが感激しない筈が無い。

ミサカに手を引かれて浮かれながら歩いていくカメダの後姿を小波は苦笑しつつ見ながら続いた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

小波達が秘密基地の戻って来た時には既に食事の準備が完全に終わっていた。

キッチンの方にある食卓には、黒野博士、立花、たかゆき、生徒会^{リーダー}長、紗矢香の五人が着いており、小波達三人を待っていた。

「やっと降りてきたか」

「早く席に着くでバツタ」

どうやら小波達が来るまで待っていてくれたらしく、たかゆきと立花が空席指差して急かす。

「遅れてすみません」

謝りながら紗矢香の隣の席に座ると、小波は紗矢香の様子がおかしい事に気付く。

お化けでも見た様に見開き、ある人物を見ている。

「……どうして?……何で御坂さんが此処にいるの?」

「？」

紗矢香の言ってる意味が分からずに小波は怪訝な顔で紗矢香の視線の先にいるミサカを見る。

「ああ、そういうことですか。あなたはお姉様に会ったのですね。ちなみにミサカは御坂美琴ではなく黒野ミサカといいます。今後とも宜しく願います」

柔らかな微笑を浮かべながら黒野ミサカはそう言うと、小波の左隣に座り、カメダはその左隣に座る。

「おおっ！！すき焼きでやんすか！？オイラ大好物でやんす！！」

食卓の中心にある鍋の中でグツグツと煮える牛肉や野菜の匂いを嗅いでカメダは年甲斐も無くはしゃぐ。

その一方で紗矢香は納得できずに怪訝な表情でミサカを見ているが、ミサカ本人は困った顔で苦笑している。

紗矢香は昼間に会った御坂美琴を高校生位まで成長させた姿のミサカを見ながらとある事を思い出していた。

それはクローン技術。

ついさつき、立花が見せてくれた黒野博士の息子達の写真。

同じ姿の人物が四十人近くもいたが、いくら兄弟であってもありえない事だ。

だがクローンと言われれば納得できる。

恐らくミサカは御坂美琴のクローン人間。

そうだと考えれば似過ぎてるのは当たり前前の事だろう。

彼女が何なのか知りたい衝動に駆られるが、紗矢香はそれを聞く事ができなかった。

聞けば彼女を傷付ける様な気がしたからだ。

「とりあえず食事にしよう、天月さんがせっかく作ってくれたんだ。話なら食べながらで構わないだろうし、ですよね博士？」

「まあおう、特に隠すような事じゃないからいいじゃろう」

紗矢香の内心に気付いた黒野博士と生徒会長がそう言うと、紗矢香は黙って頷いた。

「それじゃあ、一人だけちよつと野暮用でないが、食事を始めよう」

生徒会長リーダーが手を合わせると全員が同じ様に動く。

「いただきます！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

食事前の挨拶と共に黒野一家の夕食が始まった。

第3話 黒野ファミリー（後書き）

あれから黒野兄弟はどうなったんだろう？

第4話 転入（前書き）

転入するまで随分時間が掛かってしまった。

しばらくはオリジナルストーリーで進みます。

文が雑ですがいずれ腕が上がったら改稿しようと思っています。

第4話 転入

「軍用量産能力者計画？」

すき焼きをみんなで食べながら小波と紗矢香はミサカ本人から話を聞いていた。

「はい。ミサカは軍用目的の為に超能力（レベル5）である御坂美琴の遺伝子配列のパターンを解明して、オリジナルに近い様に完全調整されて生み出されたクローン人間です」

「ちよつて待てっ！？あんた息子だけじゃなく、他人のクローンまで生み出したのか！？」

ミサカの話聞いて一番に食いついた小波が興奮して立ち上がりテールを叩くと、酒を飲んでいる黒野博士に問いただす。

「馬鹿な事を言うな。わしはこの娘が廃棄処分されそうになっていたのを助けた恩人じゃぞ。この娘を造つたのは別の機関の連中じゃ」
何を心外な！と言わんばかりに否定した黒野博士を見て、小波はおとなしく引き下がる。

「……その事を御坂さん本人は知っていますか？」

話を聞いた紗矢香が真剣な眼差しで黒野博士と生徒会長を見据える。

一度しか会った事がないが、彼女は自らそんな計画に協力する人に見えなかった。

もし彼女の知らぬ所で好き勝手にそんな研究をしているのであれば、それは完全な人権の侵害だ。

紗矢香の質問に冷静に答えたのは生徒会長^{リーダー}だった。

「御坂美琴本人はこの事を知らない。彼女は元々筋ジストロフィーという病気の治療という題目で自身のDNAマップを研究機関に提供しただけだ」

「完全な違法行為じゃないですか!？」

本人の意思すら無視して勝手に研究を行っている事に紗矢香は非難するが、生徒会長^{リーダー}は冷静に肯定する

「そつだ。この学園都市では科学の進歩という名目で非人道的な人体実験が裏で行われている。そこにいる彼女はその結果の一部に過ぎない」

生徒会長^{リーダー}がミサカを見て言う。

小波と紗矢香も彼女を見るが、ミサカは気にした様子も無くカメラにすぎ焼きを装ってあげている。

目の前で自分の出自に対する話をしているというのに、特に気にしている様子は無い。

同じ様に話を聞いている筈のカメダに限っては、彼女の出自なんかどうでもいいように見える。

「それとっておくが、この事は君達が誰にも話さないという前提で話している。もし二人が御坂美琴本人に告げ口したり、学園都市の警備機関に伝えたら、俺は何もしないが別の誰かが君達を暗殺しようとするだろうから気をつける様に」

二人が馬鹿な行動に出ない様に釘を差すと生徒会長は湯呑みに入っ
たお茶を飲む。

そう言われては二人は何もできない。

小波も紗矢香も能力者であるが、元の世界では一般人と大差ないレベルの人間だ。

この学園都市のレベルがどれほどのものかよく知らないが、自分達の世界の怪物達を超えるほどの存在を考慮しておいた方がいいだろう。

それらを敵に回して二人が生き残る確率は限りなくゼロだろう。

「……分かった。この事は誰にも言わないよ」

「……解りました」

二人は渋々と了承する。

悔しいが自分達は非難する事しかできない弱い人間だ。

「まあ、ミサカの事はそんなに気にしないで下さい。昔は辛い事ばかりでしたけど、今は博士の娘として自由に幸せに生きてますから」

「それでバツタ！大事なのは今と未来でバツタ！」

「俺達も昔は苦労したもんだ」

「おいらなんてもつともつと酷い目に遭ったでやんす！」

過去の辛い事なんか気にせずには彼らは笑う（一人だけ自業自得の奴がいるが）。

「紗矢香、ご飯おかわり」

「はい、栄一さん」

彼らの笑顔を見て二人はこれ以上深入りするのはやめようと思った。

紗矢香から白米が盛られたご飯を受け取って小波は食べ始める。

「そういえば、今居ないもう一人の仲間ってどんな人なんですか？」

気になって黒野博士と生徒会長リーダーに聞く。

すると、二人は真剣な表情になり、

「悪いが今は教えられん」

「彼女はこの学園都市でも極一部の者しか知られていない特別な能力者なんだ。それこそ手に入れて悪用すれば世界すら手に入れられるほどのな」

言葉の端々にこれ以上聞くなと言われている様な気がして小波は仕

方なく話題を変える事にした。

「明日から俺は第七学区にあるとある高校に通って、紗矢香は博士の推薦で常盤台中学って所に通うんですね？」

「そうじゃ、場所は分からんかもしれんから立花が常盤台までお譲ちゃんを送って、お前さんは生徒会長（彼）が送ってくれるから安心するといい」

「二人共寮生活になるが、荷物は君達の部屋に置いておくから安心してくれ」

「何から何まですいません」

色々やってってくれる二人に感謝していると、小波は隣でご飯をおかわりしているメガネを思い出した。

「あいつはどうするんです？此処に住ませるんですか？」

「あやつから色々と聞きたい事があるからワシの助手になってもらう」

「おいらは別にそれで構わないでやんす。色々あって疲れたからちよっと羽を休めるでやんす」

戦い疲れた戦士の様な事を言いながらカメダはコップに注がれた水を飲む。

そして何かを思い出した様にカメダは黒野博士に尋ねた。

「 998、999、1000! 」

千回の素振りを終えて深呼吸を繰り返すと、小波は金属バットをバットケースに入れる。

高いビルの屋上の手摺に寄り掛かって学園都市を見渡すが、本当に異世界なんだと改めて実感する。

元の世界からこちらに来ていた黒野博士と出会えたのは幸運だった。彼らと出会えなければ小波達は身元不明の頭がおかしい不審者として扱われていただろう。

元の世界に戻るかどうかは博士次第だが、きっと何とかしてくれると信じよう。

「 それにしても春だけどまだ夜は冷えるな 」

ひんやりとした風が吹いて寒気を感じた小波は時間を確認する。

時刻は午後の22時を回ったところだ。

そろそろ風呂でも入って寝る準備をして寝ようかと思った時だった。

「 栄一さあ〜ん! 」

「 うお!?! 」

紗矢香の声が聞こえると同時に背後から抱きつかれて驚き、声を上

げる。

「お風呂開きましたよ」

振り向くとそこには水色のパジャマを着た紗矢香がいる。

風呂から出たばかりのせいか頬などが上気しており、艶っぽい。

三年前は自分の事をお兄ちゃんと呼んで慕ってくれる可愛い女の子だったが、今では五十鈴さんに似て可愛いよりも綺麗という言葉の方が似合う気がする。

「相変わらずの野球馬鹿だね」

紗矢香が小波の手にあるバットケースを見て呆れた顔で言うと小波は苦笑する。

「それだけが取り柄みたいなものだからね」

「野球をする為に生まれてきた様な存在でやんす、って、おじ様達が言ってたものね」

「あれは洗脳に近かった様な気がするけどね」

思えば養子になってからずっと野球の事を考えさせられていた様な気がする。

「でもそれで今の栄一さんがあるんだからおじ様達には感謝しないと」

何か想像しているのか頬に手を当てて朱に染まってデレる紗矢香。

「ありがとう。それじゃあ俺も風呂に入って明日の為に寝ることにするよ」

「あつ！？ちよつとお願いしていいかな？」

「ん、何を？・・・ああいよいよ、恋人だもんな」

目を瞑つてこちらに顎を上げている紗矢香の意思に気付いた小波は彼女の両手に手を置くと軽く唇に触れるだけのソフトキスをした。

「うふふふふ、キスしちゃった」

いつもの仕草でデレる紗矢香。

本当に漣さんに似てきたなと小波は思う。

「それじゃあ、おやすみなさい！」

「ああ、おやすみ」

屋上から出て行く紗矢香を見届けると、小波は夜空を見上げる。

「何処の地球でも星空は一緒だな」

少森寺で修行中に何度も脱走しようとして失敗する度に夜空を見上げて倒れていた事を思い出して自嘲の笑みを浮かべる。

こっちの世界の事なんて何も分からない。

生徒会長の問いに黒い学生服を着た小波が苦笑しつつ答える。

これから共に勉学を学ぶ仲間達の前で自己紹介すると思うと少し恥ずかしい。

そんな小波の内心に気付いた生徒会長は微笑を浮かべると、

「そんなに固くなる事はない。君がこれから学ぶクラスは担任もクラスメイトも個性の強い面白いクラスだぞ」

「そんな事よく知ってますね」

「俺は生徒会長だぞ、この学園都市にいる全生徒と教師の名前や能力、得意分野など位は全て記憶している」

「いや、それ凄すぎでしょうー」

とんでもない事を平然と言っただけの目の前の男に小波はツッコミを入れる。

思えば目の前の男は謎が多すぎる。

生徒会長という呼び名位しか知らない気がする。

「生徒会長はいつからこの学園都市にいるんですか？」

興味半分で何でもいいから聞いてみるが、生徒会長は意味深な笑みを浮かべ、

「それは秘密だ。その方が色々都合もいいしカッコいいからな」

「そうですかい」

話す気ゼロの生徒会長リーダーに苦笑して返すと、二人は職員室に入る。

中には大勢の先生がいて、生徒会長リーダーはとある人物の姿を探して中を見回すと、目的の人物を見つけたらしく近づいていく。

「ご無沙汰してます月詠先生」

「あっ！？九鬼君じゃないですかっ！お久しぶりです！」

（ 九鬼君？それより、これが先生だと！？ ）

生徒会長リーダーと親しく話している月詠先生という人物を小波は凝視する。

身長は一三〇センチの中頃くらいで、誰がどう見ても真っ赤なランドセルが似合いそうな小学生にしか見えない。

元の世界でもこんな人物はいなかった様な気がする。

「彼が私の新しい生徒ちゃんですか？」

「その通りです。月詠先生にしか任せられないんですよ個性の強い生徒はね。ほら、男なら自分で自己紹介しろ」

「あ、はい！小波栄一です。これからよろしく願います！」

何事も最初が肝心だと知っている小波は元気よく挨拶をする。

「ふふふふ、元気でよろしいです。先生の名前は月詠小萌というのですよ。それじゃあ後は先生に任せてくれればいいので、九鬼君は帰っていいですよ。」

「後はお願ひします。」

真面目な顔で丁寧に頭を下げると生徒会長は職員室リーダーから出て行った。

「それじゃあ私達も教室に向かうですよ。」

ニツコリと笑顔を浮かべながら職員室を出て行く月詠先生に小波は付いて行く。

その途中で気になった事があり、小波は尋ねる。

「生徒会長リーダーの事を九鬼君って呼んでましたけど、それがあの人の本名なんですか？」

「いいえ違うのですよ。彼は何もかも謎が多過ぎる人物ですけど、この学園都市の生徒会長として色々な公務に参加しなければいけないので九鬼孝義という偽名を使っているのですよ。」

「ふん」

本当に生徒会長なんだと一人納得すると、月詠先生が立ち止まる。

「さて、此処が私が受け持つクラスなのですよ。」

気付いたらいつの間にか一年七組の教室の前に来ていた。

「はい」

担任の先生に指差された教室の一番後ろの方の席に向かって座り、カバンを机の上に置くと、紗矢香は周りのクラスメイトに挨拶をする。

「これからよろしくお願ひします」

「どうもこちらこそ、ようこそ常盤台へ……！私は白井黒子と申します。以後お見知り置きを」

白井黒子と名乗ったツインテールの少女が手を差し伸べてきて、紗矢香は微笑みを浮かべるながらその手を取って握手した。

お嬢様学校という事でちょっと緊張していた紗矢香だが、何とかやっつけていけそうだと少しばかり安堵した。

第4話 転入（後書き）

小説を書く勉強がまだまだ足りない。
もっと精進せねば！！

第5話 Vリーグへの道（前書き）

パワポケの主人公には相棒が必須なのでオリジナルの相棒を出します。

それと最後に出るとある人物ですが、徐々に明らかになっていきます。

第5話 Vリーグへの道

始まりがあれば必ず終わりがある。

この言葉が正しいのなら無限や永遠という言葉は否定される。

宇宙は無限に広くは無く、世界は永遠には続かない。

星に寿命がある様に、宇宙を含めた世界にも寿命はあるのだ。

その最後を見る頃にはあらゆる生物が死に絶えているだろうが、一人の男はとある約束の地でその時を静かに待っていた。

とある漆黒の空間の中で男は目を瞑って静かに佇んでいる。

陽の光も、星の光も何も無く、自分の姿も確認できないほど暗い空間。

何も聞こえなく、何も感じ取れない。

生き物ならまず生きられない世界の中を男は平然としているが、とある事に気付くと眉を顰めた。

待ちに待った世界終焉の時である。

漆黒の空間が徐々に消滅して感覚が透明になっていく。

いや、何も感知出来なくなっていると言った方が正しいかもしれない。

妙な夢を見ていた様な気がするが、所詮は夢だと深く考えずに欠伸をする。

直毛と癖毛混じった混合毛の茶髪に、起きたばかりで眠たげだが真つ直ぐで強い生気の光を宿した瑠璃色の瞳。

幼さを残しつつもきりりと整った中性的な顔立ちに、スマートで引き締まった体付きをしており、着崩した黒い学生服の下に青いシャツを着た少年はたんこぶを摩りながら伏せて寝ていた机から体を起こすと、視界に腕を組んで不機嫌そうな顔でヒカルを見下ろしている女子と目が合った。

「おはよう、吹寄。もう昼か？」

「まだ朝のホームルーム前よ！いつもいつもだらけ過ぎなのよ武蔵は！」

背に流れる長い黒髪を耳に引っ掛けるように分けて、おでこが大きく見えるようにしてある髪型に、着ている黒いセーラー服の胸元を見事に押し上げているほどの巨乳を誇る美人、吹寄制理はヒカルが起きたのを確認するとヒカルの右隣にある自分の席に戻る。

「・・・うん？もう八時半過ぎてるけど小萌先生はまだ来てないのか？」

教室を見渡して時計を見ると、すでに朝のホームルームが始まる時間を過ぎてている。

時間を体内時計できっちり把握している幼い容姿の担任にしては珍

しい。

「転校生が来るらしいから、ちょっと遅れてるのよ」

「入学して間もないのに転校生かよ。どんな奴か調べはついてんのか刑事さん？」

「誰が刑事さんよ。・・・さあね、あの馬鹿共なら知ってるんじゃない？」

吹寄が窓際の方へ視線を向けると、ヒカルも同じ様に向ける。

そこには逆立てたツンツン頭の少年、目立つ青い髪にピアスを着けた長身の少年、金髪でサングラスを掛けた不良っぽい少年の三人がいる。

ツンツン頭の不幸体質な少年・上条当麻。

青髪にピアスを着けた長身の少年・青髪ピアス。

金髪でサングラスを掛けた不良っぽい少年・土御門元春。

クラス一訳の分からない男である武蔵ヒカルを入れてクラスの4バカ（スクウェアフォース）と呼ばれている。

「何を盛り上がってたんだ、我が同志達は？」

「私が馬鹿共の事を知る筈無いでしょうが。むしろあんたの方が解るんじゃないの？」

「それもそうだな」

席から立つとヒカルは窓際にいる三人に近付く。

「どうした我が同志達よ？我輩抜きで何を盛り上がっているのかAからZまで説明してくれ」

「おおっ！やっと目が覚めたのか戦友！」

「タケヤン！これ見てみいや！」

「にゃ〜。とうとう俺達に億万長者になるチャンスが来たんだがにゃ〜」

青髪ピアスが一枚のポスターをヒカルに広げて見せる。

『ビクトリーリーグ』と大きく書かれたカラフルな野球関係のポスターを怪訝な顔で見っていくと、優勝賞金の部分で目を見開く。

「優勝賞金一億円だと！？たかが野球の大会でか！？」

『ビクトリーリーグ』 通称『Vリーグ』と呼ばれている世

界一の野球チームを決める世界規模の大会で、参加資格は中学生以上であるのなら誰でも参加可能（ただし超能力等の類の使用は禁止）。

プロを除くアマチュアの野球チームの世界一を決めるべく、三年前から世界のトップ企業となったダイバイングループが主催しているみたいだ。

確かに世界規模とは凄い。

恐らく多くのチームが参加するだろう。

学園都市からでも参加出来るとなると、特に学園都市では甲子園を
目指せない各校の野球部の連中が気合を入れて挑んでくる筈だ。

能力無しでも勝ち目はゼロに等しい筈なのだが……。

「なっ！ 上げえだろ！ 不幸な毎日を送る上条さんはこれを機に不幸
な人生を変えようと思う！ いや、変えるんだ！！」

「世界生中継でもされて、ボクの勇姿を見た女の子達がときめいて
ハーレムエンドを迎えられるかもしれへんで〜！」

「俺達の名を世界に知らしめるチャンスだぜ〜い！」

何故か地区大会、全国大会を通り越して世界大会しか見ていない親
友達にヒカルは疑問に思う。

（こいつら、必勝の手段とか頼もしい助っ人でもいるのか？）

気になってヒカルは聞いてみる。

「必勝の手でもあるのか？ 頼もしい助っ人がいるとか？」

「……そんなものはない！」「……」

見事に三人は同調してきっぱりと言いつつ切った。

誇る事でもないのに偉そうに感じる。

「なら何でそんなにはしゃいでんだよ？叶わぬ夢を見ているだけみたいで滑稽だぜ」

「俺達には確かに何も無い！」

「その通りや！けど、タケヤンなら色々なパイプが太いから何とかなるやる？」

「それに挑戦バカのタケヤンなら、きつと参加して優勝するに決まってるにゃ〜」

全て任せたと握りこぶしで親指を上立てる三人を見てヒカルはム力つく奴等が立てている親指をへし折ってやりたいと思いつつ内心がっくりとした。

（他力本願かよ・・・！？まあ、挑戦のしがいがあって面白そうだけどな）

改めてポスターを見てみると参加受け付け修了の日まで丁度一週間しかない。

たった一週間の間に十五名の参加定員人数を集めてスポンサーを見つけ、チームを創設しなければならぬ。

目標が困難であればあるほど面白い。

挑戦こそが我が生き甲斐と日頃から豪語して実践するヒカルは学園都市で色々と有名である。

例えば何処かのスキルアウトのグループに捕まったとある薄幸の親友を助けるべくスキルアウトのグループを片っ端から潰したり、とある青髪ピアスが修行に出ているパン屋が潰れ掛けた時には不死鳥の如く甦らせ、とある問題を起こして風紀委員ジャッジメントや警備員アンチスキルに学園都市中に指名手配された時も完全に行方を晦まして逃げ切った。

恐らく学園都市で一番有名な無能力者（レベル0）だろう。

「いいだろう。獲ってやろうじゃねえか、世界の頂点を・・
・！！！」

覇気の込められた言葉と共にヒカルは不敵な笑みを浮かべる。

「おおっ！？やっぱりやるのか！」

「それでこそタケやんや！」

「にゃ〜。俺達もできるだけ協力するから頑張るぜよ」

ヒカルがやる気になったのを見てテンションが上がる親友三人。

「当然だべ。お前らには思う存分働いてもらうからな」

上条も青髪も土御門も素材は良いのだ。

鍛え上げれば戦力として十分に通用するはずだ。

他の連中も身体能力が高い面子を揃えればそれなりのチームにはなる。

『おはようございます!』

クラスに響く生徒の元気な挨拶を聞くと月詠先生は満足そうに頷く。

「元気でよろしい!今日はホームルームを始める前に素敵なお知らせがあります!何と今日から皆さんと一緒に勉強する仲間が増えるのですよ!ちなみに男の子です!残念でした野郎共、おめでとう子猫ちゃん達」

クラス内がざわめき、男連中ががっかりするのに対して、女子達は期待の込もった眼差しを教室のドアの方へと向けている。

「それじゃあ入って来てくださーい!」

クラス中の注目を集める中、教室のドアがガラガラとスライドして一人の男子が緊張しているのか恥ずかしそうに入ってくる。

短く刈った黒い短髪に強い意思と熱意を感じさせる真っ直ぐな眼差し。

それなりに整った顔立ちをしており、高校一年では長身でスマートに見えるが無駄が無く引き締まっているのが黒い学ランの上からでも分かる。

まるで高校球児みたいだなと誰もが思っただろう。

入って来た男子生徒は、月詠先生の隣に立つとクラスの中を見回す。

「それじゃあ皆さんに自己紹介をしてください」

「はい。今日からこのクラスの一員になる小波栄一です。趣味と特技は野球です！これからよろしく！」

パチパチ！！クラス内に拍手が響き渡り、小波はちゃんと自己紹介が終わってほっとした。

「それじゃあ席なんですけど・・・武蔵君の後ろでお願いしますね」

「はい、分かりました」

後ろの席の方で手を振っている茶髪の男の席の後ろが空いているのが見えて、小波は頷くと席に向かって座る。

「ようこそ一年七組へ。俺は武蔵ヒカルだ」

「こちらこそよろしく」

ヒカルが後ろを向いて屈託の無い笑顔で自己紹介をすると握手を求め、小波も差し出された手を取って握手した。

その際にヒカルは小波の手の感じを感じてかなりの実力者だと判断すると期待を込めて、

「さっき野球が趣味で特技だって自己紹介で言ってたよな？ポジションは何処だったんだ？」

「投手がメインで、サブポジで外野だけど」

それを聞くとヒカルは意味深な笑みを浮かべ、内心喝采した。

運が良い。

まさかこんな都合よく実力派の投手が現われるなど運命としか思えない。

何としても彼をこれから作るチームに誘おうと決める。

「学園都市じゃ超能力のせいで甲子園とか目指せないけど野球部に入るのか？」

「うん……一応そのつもりなんだけどさ……」

「なら俺達と一緒にこれで世界を獲ってみる気はないか？」

ヒカルは小波にさっき上条達から貰ったVリーグのポスターを手渡して見せる。

「世界一の野球チームか、面白そうだな！」

小波はフィンチーズ時代を思い出して、好奇心が湧いてきていた。

高校球児達の憧れの地である甲子園は目指せないが、世界一を目指すというのは面白そうだ。

おまけに「一緒にやってみる気は無いか？」と誘いまで掛けてくれている。

「いいよ。俺も一緒に参加させてくれ」

「ほらよ、グローブを野球部から借りてきたぜ」

グローブを二人に渡すと、小波はマウンドに上がり、ヒカルはホームベースの後ろで屈んでミットを構える。

「さてとお手並み拝見ぜよ」

「何処まで勝ち進めるのかは、ナミヤンの実力次第やからな」

「野球大会で何回も優勝した事があるそうだったよ」

土御門、青髪ピアス、上条が呑気そうに二人を遠目から見守る。

すると、三人は二人の空気が変わった事に気付いた。

言い知れない威圧感と気迫を感じ取り、見間違いかもしれないが二人から闘気らしきものが見える。

これは力試しとかそういうのではなく、一種の真剣勝負だ。

小波が大きく振り被り、豪快に足を上げる。

そして大きく踏み込んでボールを投げるべく腕を振るった瞬間

ドゴオン！！という音がグラウンドに響いた。

「すげ〜！」

上条が予想外のものを見て感嘆の息を漏らし、

「ピュウ〜」

その部屋は一言で言うならば宇宙である。

本物の宇宙ではなく、壁や天井を始めに床すらも精緻な全天周モニターに映し出される虚構の宇宙が映し出されている。

部屋に置かれた高価そうな事務机やソファーなどは、何も知らなければまるで宇宙に浮かんでいる様にしか見えない。

そんな奇妙な生徒会室の中には一組の男女が空間に映し出された映像を見ていた。

「友達ができたみたいで何よりだ」

映像に映し出されている楽しそうな小波達を見て呟いたのは左眼に黒い眼帯を着け、黒い学ランを着た男、学園都市の全生徒の頂点に君臨する生徒会長だ。

彼は生徒会室で事務仕事をしながら彼らの様子を見ていた。

問題無く溶け込んでいる小波を見て、あの学校に入れて間違いないか
つたとほっとしていたりする。

「ナイスボールだ。良いバッテリーじゃないか、Vリーグも思った
より盛り上がりそうだ」

尊大な口調でモニターに映る彼らを評価したのは生徒会室でソファ
ーに座りながら事務仕事をする女性だった。

栗色のポニーテールに理知的な光を宿した瞳。

化粧なんか必要無いほど美人と言える美貌の持ち主で、赤い胸元のリボンに濃紺のブレザーの上からでも分かるほどそれなりにスタイルも良いのだが、学生とは思えない程の堂々とした貫禄を感じさせる二十歳前位の若い女性だ。

生徒会副会長

それが彼女の生徒会での役職である。

つまり彼女は学園都市にいる全生徒のナンバー2という立場にある。

「それにしても野球か・・・私という者は一度死んでもとことん縁が切れないらしい」

自嘲の笑みを浮かべながら副会長は書類を整理する。

「元プロ野球団のオーナーもした事があるんだったよな」

彼女の経歴を思い出して生徒会長はモニターに目配りしながら聞いてみる。

「どうだ？彼らは君の目から見て面白いと思える人間達か？」

「そんな事はまだ分からぬに決まっている。箱の中の猫がどうなっているのかなど、開けてみなければわからないのだからな」

「それもそうだ。言葉よりも行動こそが何よりも大切な事だ。」

「だったらさっさと溜まった仕事しろ。九鬼孝義という偽名で構わんから書類に書け」

「分かっている」

上下関係など無いに等しい二人の会話が終わり、生徒会室にペンを走らせる音が聞こえる中、生徒会長は一つの書類を見て眉を顰める。

「学園都市の第0位・根源知識と天位・默示業火メキドフレイムからまだ良い返事はもらえないのか？」

書類と一緒に付けられている黒髪黒眼の美女と金髪に深紅の美丈夫の写真を見ながら副会長に問うと、副会長は溜息を付き。

「第0位はともかく、天位の方はダメだな。人の言う事を聞く様な奴じゃない、諦めろ」

ぶっきらぼうに答えられて生徒会長リーダーは苦笑すると、椅子にもたれかかって上を見上げて溜息を付いた。

第5話 Vリーグへの道（後書き）

そろそろ登場人物の設定などを投稿します。
能力の序列ですが、天位>第0位>第1位となっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0565ba/>

とある野球少年の異世界目録

2012年1月12日01時52分発行